クロスカルチャー出版ニュース
2024.9.30 号

北野秋男編集・解題
『戦後学力テスト研究資料集』
（全３巻）が『週刊読書人』
（２０２４年９月 20 日）に掲載
されました。

日本の学力テストの「今」と「未来」

「ローカル・テスト」の調査から見えてくるもの

金馬国晴

北野　秋男編集・解題
戦後学力テスト研究資料集
全3巻

近年、教育関係者でない方も、子どもの「学力が低下した」という報道を耳にしたことがあるだろう。教育界では、本当に低下しているかやその根拠も論争されてきたが、日本の、または各都道府県等の学力と表現した時点で、扱われているのは個々人の成績ではなくて、あくまで集団的に集計をした数値である。

学力のこうした問い方は主に戦後初期に始まった。それを論争史、運動史でたどる研究ならなされてきたが、各学力テストの設問やその解説、理念に立ち戻った研究は多くない。また、その根拠となる調査自体の引用も一部にとどまってきた。「ナショナル・テスト」と言われる全国調査は研究されてきたのに対し、本資料集の独創性は顕著である。収録されたのが「ローカル・テスト」、すなわち都道府県や市町村で行われた調査に関するわたる研究書を刊行されている。本資料集はそこに整理・引用された冊子を膨大に掲載したもので、連動した出版となっている。

解題で強調される本著の学術的な意義は、「現代において全国的に普及・浸透する学力テスト体制が戦後直後から構築された歴史的基盤の上に成立するものであったこと」（一頁）の解明であり、これは「日本の学力テスト体制の革新性・先駆性、ならびに多様性・多元性を確認することでもある」（同）とする。そして、「戦後の学力テストの歴史を知ることは、日本の学力テストの『今』と『未来』を探ることでもある」（一一頁）と、端的に言う。

解題で整理された各県の特徴が極めて的確なのは、同氏の資料収集、選定、読解、分析の蓄積がなせる技である。同社で『戦後初期コア・カリキュラム研究資料集』を出版した経験をもつ私には、多大なご苦労が想像できる。こうした資料の原本は、地元の印刷所で製本されたもので、わら半紙的な紙質の冊子もあろう。書籍でないから、散逸したり、捨てられたりした例や、全巻が揃わず、行政の年報には記述があるのに現物が見つからない例も多々あろう。掲載されている資料には、全国に一冊しか発見できないものも多いに違いない。

戦後初期にいかなるテスト問題が作られ、いかに分析がなされたかという点でも興味深い。例えば、あらゆる要因（学校・家庭・近隣環境、対人関係、保護者、家庭文化度、学習意欲、勉強方法、健康度など）の学力への影響、分析に用いた統計学的な計算式、男女得点比較、誤答の原因分析、学年比較、それらに基づく対策の提案は複数の県に見られる。だがさらに、市・町・平村・山村・漁村に分けた分析（山形県）、学年を通して得点の高い問題と低い問題や学年が進むにつれて得点の進歩度の高いものと低いもの（群馬県）、早生れ遅生れ児童の比較（埼玉県）、調査協力学校を工業型・住宅型・工業住宅型・商業工業住宅型・農業型など九つに分けた分析（神奈川県）など、興味深い記述や図表が発見できる。

本資料集が資するのは、教育等の学者にとどまらない。各地の教育委員会や教育研究所・センターや教育産業が組織として、またそれらに勤める方々が、学力に関心を持つ限り、入手し一読すべき土台と言える。現場教員にこそ示唆深いはずだ。今後も続くシリーズ物（今回は北海道編～東海編の全三巻）であるが、ぜひ図書館等にリクエストされるなどしてご活用いただきたい。（きんま・くにはる＝横浜国立大学教授・教育学）

★きたの・あきお＝日本大学特任教授・教育思想・アメリカの教育。著書に『日米のテスト戦略』『アメリカ公教育思想形成の史的研究』、共著に『現代学力テスト批判』、編著に『現代アメリカにおける教育アセスメント行政の展開』『日本のティーチング・アシスタント制度』など。

B5判・約2000頁・110000円
クロスカルチャー出版
978-4-910672-38-0
TEL. 03-5577-6707

編者の北野秋男氏はすでに『地方学力テストの歴史　47都道府県の戦後史』（風間書房、二〇二二年）という六五〇頁に資料なのだ。